

もっと知ろう “陶”

29 方言昔話(1) きんだりの池

この池にやなあ、かわ～そんな話があるんじゃ。むか～し、この池で身を投げちまわっせたかわ～そんな女の人のお話だ。

なんでも、その女の人にやあ、たった一人のかわええ坊やがおったんだが、人さらあいにあっちまったもんで、子供を探してたったひとりでお～品がある人でなあ～、頭にしとお～つだけ金のかんざしをさあとらした。

ここ井の平の池まで来て、池の縁の石に腰をおろしておらさせたが、やがて深あため息とともに池の中へ身を投げてしまわしたげな。金のかんざしをさあたまんまで…。

それからだあ～ぶたってからだけんど、池の中を金色の蛇が泳おどるところを見たちゅう人が現れた。しかし、さあ金の蛇を見ようたって、蛇はなっかなか姿現れへん。そのうち、みんなはそんな話を忘れかけとった。

ある年のことやった。池のそばの山に、でっかあ松の木が生えとってのお、そこにでっかあ鷲が巣うくったげな。その鷲は猿爪村はもちろん、水上村や大川村や吉良見村の辺まであっちこっち飛び回っては、百姓家の鶏や鯉までさらって行くよおになったげな。それどころか、外で遊んどる子供にでも襲おかかる始末やった。

村の衆は、「このまんまぶつとくわけにやいかん！」ちって、村中の人総出て、松の木のくろまありで鐘や太鼓をたたっからかあてがやすとさあと、鷲はいつぺんは大空に発ってくけど、みんなが帰ちまうと、また空をゆうゆうと回ってから、巣へ戻ってきまう。村の人たあもあきらめかけておったげな。

ある朝の事やった。

そこら辺がばかに騒がしいもんで外に出てみるが際と、どうもあの鷲が高あところでギャギャ騒いどるようだった。よお見るが際と、鷲がいつもと違ってえらそ～なかつこおをして空をぐるぐる回とる。更によお見ると鷲の首に何か巻きつうとるやなあか。そいつがまた金色に光とる。村の人たあは、「あっ、金の蛇だ。あん時の金色の蛇が鷲をやっつけてくれているに違いない。」みんな、ずっとあんぬいて見とったげな。だあぶたってから、さっきの鷲はとおとお逆てんぼこ～て、ボタの向こうのあの池に落ちてしまった。村の人たあは、慌てこおて池の方へ走ってってみたけど、池の水面にでっかあ水の輪が残とるだけで、蛇の姿も鷲の姿もなあんにもあらへん。

それからちゅうもん村の人た～は、池の神様にお供えしては、金の蛇に深お感謝して拝んたげな。それから誰ちゅうことなしに、この池の事を金の蛇が入った池、「きんだりいけ」と呼ぶよおになったげな。

